

# 服装・身装文化デジタルアーカイブ： 36年のあゆみと今後の課題

高橋晴子

(国立民族学博物館学術資源研究開発センター 外来研究員)

よろしくお願いたします。皆さんには範囲が狭いのでは、と思われるかも知れませんが、「服装・身装文化デジタルアーカイブ」という、服装・身装を通して人文系のデータベースをどう作ってきたか、ということをお話したいと思います。「身装」という言葉は後ほど説明させていただきます。では始めさせていただきます。

## 服装・身装文化デジタルアーカイブ作成の基礎となった活動

### 大阪樟蔭女子大学

#### 衣料情報室

- 1976年に衣料情報室を創設（当時、樟蔭に在籍していた大丸弘氏による）
- 現在のラーニング commons 的な機能をもつ
- 服装関係二次索引誌『衣料情報レビュー』発行
- 自称 私は服装専門のドキュメンタリスト
- 2001年から高橋は教員に

### 国立民族学博物館

#### 大丸弘研究室

- 1984～1995 服装の資料のデータベース化の研究と構築
- 1988～1989 共同研究会「服装の比較文化論基礎研究—関連シソーラスの評価」（代表：大丸弘）
- 1990～1995 共同研究会「服装DB構築のための基礎的理論」ならびに「服装DB構築のためのドキュメンテーション手法」（代表：大丸弘）
- MCDプロジェクトを形成—現在12名のメンバーから成る

大阪樟蔭女子大学の衣料情報室でドキュメンタリストとして活動

まず、36年間の基礎となった活動ですが、大阪樟蔭女子大学に勤務していましたが、この大学に在籍しておりました大丸弘先生、2017年に亡くなられたのですけれど、この先生が作られた衣料情報室にいました。この衣料情報室が目指していたのは、今から思えば、現在のラーニングcommonsです。ライブラリアンが一人いて、分からないことには答え、なおかつ図書館に誘導するという役割を負っていた。同時に、今までの研究をどう体系付け、服装と身装文化に関して現在どのような研究があるか、フォローするために『衣料情報レビュー』という抄録索引誌を発行しておりました。私は、自称「服装専門のドキュメンタリスト」という言葉を使っていましたが、「ドキュメンタリスト」はフランスで影響を受け、勝手に使っていた言葉です。2001年に私が教員になったため、それ以降、衣料情報室という名前はなくなり、学科の談話室みたいになってしまいました。

## 民博の共同研究がその後の研究を方向づけた

大丸弘先生が国立民族学博物館（民博）に1978年頃赴任されたのですが、その当時の民博のコンピュータシステムが凄かったのです。3階に大型の計算機を据えた部屋があって、今から思うとおかしいようですが、そこが観光名所になっていたわけです。民博へ来た人は皆そこを見学して、民博はこんなに凄いものを持っているのかと、感動して帰っていく。初代館長の梅棹忠夫は博物館はモノと情報化が一体化した博情館でなければならないと言っていました。博情館の象徴だったわけです。大丸先生はそのコンピュータにも惹かれて、まだ服装・身装文化のインフラがきちんと行き届いていない状況にあって、このようなコンピュータがあれば、データベースを作れるのではないかと期待して民博に移られたということです。民博という研究機関は共同研究をどんどんしなければなりませんから、シソーラス共同研究会とドキュメンテーション研究会が立ち上がり、私も参加し、それがその後の私の研究の基本となりました。

衣料情報室では衣料関係の情報サービスの提供を行ない、民博ではデータベースを構築するにあたっての研究をやっていたということです。現在、私たちのプロジェクトであるMCD（みんぱくコスチュームデータベース）プロジェクトは12名のメンバーで構成されています。メンバーは、人文系の研究者と理工系の研究者、さらにプログラマーとか元々は文科省にいた行政関係の方とか、様々な領域の人達が一体になって、続いています。

### パリ（現・フランス）国立図書館でのカルチャーショック

リシュリュー通りにあったBNPの  
図書閲覧室



- 第一のカルチャーショック 1980年代～  
1990年代半ば
  - テゾリユース（ニシソーラス）の充実
    - ラバル大学作成（米国議会図書館のsubject headingsのフランス語版）
  - 書籍と雑誌、版画、コイン、メダル、地図などが同列に扱われる
- 第二のカルチャーショック 1990年代後半～
  - オパックの充実
  - 1990年代の後半から、BNF以外も対象として、ガリカ（Gallica 電子図書館—図書・雑誌以外に写本、地図、楽譜なども含む）を公開

## フランス国立図書館で大きなカルチャーショックを受けた

私が「ドキュメンタリスト」という名称を自分で使っていたのは、パリのリシュリュー通りにあるフランス国立図書館での経験によります。この写真は入り口から入ったばかりのところにある円形の閲覧室ですが、この図書館でものすごいカルチャーショックを受けたわけです。1980年代から1990年代の半ばにかけての頃です。一つは「テゾリユース(thesaurus)」、フランス語のテゾリユースは英語のシソーラスですが、ライブラリアンがテゾリユースという言葉を使っていたのです。中身はカナダのラバル大学(Université Laval)が作成したもので、米国議会図書館の件名標目表(subject headings)のフランス語版でした。日本では分類が好まれますが、フランスではテゾリユースが充実していて、言葉で検索することがこれだけ浸透しているのか、というのが私にはすごいショックだったのです。それから書籍と雑誌だけではなく、コインとかメダルとか版画とか、それらがテゾリユースの中で同列に扱われていることも大変なショックでした。

## フランスの図書館界のデジタル化動向に大きな刺激を受けた

第二のカルチャーショックを経験したのが1990年代の後半です。それまでずっと私たちはゆっくりとカードを繰って資料を請求していたわけです。日本ではJAPAN MARCとか躍起になっていた時期があったのですが、全然気にしないで、カードで繰っていた。それが1990年代の後半になると、ガラッとドラスチックに変わったのです。図書館閲覧室のOPACが充実して、ネットで本の注文ができるようになり、色々なことがこのところでガラッと変わりました。そしてOPACを見ると、ちゃんとテゾリユースで扱われている言葉が全部入っていた。これにすごい感激を受けました。1990年代の後半は、フランス国立図書館が館外に向けてGallica(ガリカ)の公開を開始した時期でもあり、いっぺんにデジタル化が進んだと思います。同時に図書館だけではなく、博物館のネットワークであるJoconde(ジョコンド)が生まれ、当初はフランス国内だけだったのが現在のEuropeana(ヨーロッパアーナ)に進化しました。今でもEuropeanaの半分以上はフランスが占めていると言われますが、なるほどと頷けます。こういうカルチャーショックを体験したことで、日本でも、私たちの分野でもこういうものが欲しいという気持ちが高まりました。これが原動力になって今に至っています。

### MCDプロジェクトの造語「身装(身体と装い)」の概念が生まれた背景

- 1980年代後半から1990年代にかけて、人文科学の分野では、「人のイメージ」を総合的・現実的に認識する傾向が強まる。
- 記号学や身体論の発展
  - ジュリアス・ファスト『ボディ・ランゲージ』(1971)
  - アンドレ・ルロア＝グーラン『身ぶりと言葉』(1973)
  - デスモンド・モリス『マンウォッチング』(1980)
- フランスのアナール(annals =年報)学派の研究
  - 社会経済史年報にかかわった歴史家が中心となる
  - 生活文化を科学的に捉える→学際的な専門家が集まる
  - フィリップ・アリエス『子供の誕生』(1980)など
- 文化の側面から装いを捉える→服装から身装へ

## 服装を文化の面から総合的に把握するための言葉としての「身装」

身装という言葉は私たちの造語ですが、この概念が生まれた背景をお話しします。1980年代から1990年代にかけて、人文科学の分野で、人のイメージを総合的に捉えようという傾向が強まりましたが、外国より10年遅れた動きです。皆様ご記憶だと思うのですが、記号学とかボディランゲージとか、そういう新しい学問や概念が脚光を浴びるようになるのがこの時期です。その潮流を先導した書籍の日本語訳もたくさん出版されました。代表的なものでは、デズモンド・モリスの『マンウォッチング』などはかなり浸透したと思います。それからフランスのアナル学派、これは生活文化を科学的にとらえることを目指した歴史学ですが、フィリップ・アリエスの『子供の誕生』はよくご存じだと思います。私たちは常々、文化の側面から服装を捉えていこうと考えておりまして、最初、服装という言葉を使っていましたが、段々と身装という言葉を使うようになりました。

### 「身装（身体と装い）」の概念

- 単なるモノとしての衣服・アクセサリーではない
- 人間のヴィジュアルなイメージの全体
  - からだつき、容貌、ヘア・スタイル、化粧、衣服・アクセサリー、動作・ポーズ、表情、
  - 人をとりまく情景・環境
- 避けるのこのできないテーマ
  - アイデンティティの確立
  - コンプレックスなどの自意識
  - からだやセックスアピールに関すること
  - 憧れ など
- 「身装」の概念に添って、データを収集
- そして、適切なメタデータの設定
- 現在、4本のデータベースを公開

5

### 身装概念に基づきデータを収集し、データベースを構築した

身装の概念は、もうお分かりいただけたと思いますが、衣服を単なるモノとして、アクセサリーとして捉えるだけでなく、衣服を取り巻くヴィジュアルなイメージ全体を文化の面から見ていこうという考え方です。そうになると、衣服はその一部に過ぎなくなる。アクセサリーも一部です。身体や表情などが全部皆の眼に入ってきます。皆さんは他人を見るとき、最初にどこを見ますか。服装なんかあまり見ませんよね。それよりもその方の眼とか顔とか表情に気持ちがいくと思います。人間は必ずどこかの情景にいます。あくまで人が装うということを中心におきつつ、その情景、環境まで含めましょう、というのがこの身装概念です。さらに、身装概念において避けるのこのできないのが、アイデンティティやコンプレックスといった心理的な面、それからセックスアピールや憧れのような、生きていく上で本当に人間の原動力になるものです。これらの面が全部、その人の表情とか着ているものに表れるという点では、身装の概念を考えていく上で避けることはできません。こうして、身装の概念に沿ってデータを収集し、適切なメタデータを付与し完成したのが4本のデータベースです。



## 服装・身装文化資料 デジタルアーカイブ

- 国立民族学博物館から発信
- <http://www.minpaku.ac.jp>
- 身装文献: 1868年～
- 衣服・アクセサリ標本資料(民博所蔵標本資料)
- 近代日本の身装電子年表
- 身装画像データベース「近代日本の身装文化」
- データ件数('19/11現在)
  - 合計 約44万件



4本のデータベースとは、身装文献データベース、衣服・アクセサリ標本資料、近代日本の身装電子年表、身装画像データベースで、これらを総称したものが服装・身装文化資料デジタルアーカイブです。もちろん、最初から4本のデータベースができたわけではありません。これらのデータベースは国立民族学博物館から発信しています。去年(2019年)7月に国立民族学博物館との間で、この4本のデータベースに関する著作権を共有することで合意に至りました。そのメリットと限界は最後に申し上げます。身装文献データベースの収録範囲が1868年以降ですから、4本のデータベースが完成したとき、近代日本の文化資料という特徴が自然に浮き彫りになりました。データベースの収録点数は現在、約45万件くらいです。画面を覗いていただければありがたいです。

## 身装文献DB

- 家政学・繊維工学の面からの繊維・衣服研究が盛んで、文化としての装いに関する研究が欠落
- 1976～2000年 服装関連抄録索引誌『衣料情報レビュー』を年2回発行
- 1984年～ データベース化
- 文献の存在と所在を知る から
- 現在はデジタル化された文献入手も
- シソーラスにあたる「身装概念コード表」の作成
- 1967-2000年についての4冊の『服飾文献目録』（日外アソシエーツ）を発行
- 1868年-1945年までの『服飾関連図書目録』（日外アソシエーツ）を発行

### 基幹データベースとしての身装文献データベース

それでは身装文献データベースからご紹介します。家政学や繊維工学から繊維や衣服を捉える研究が非常に盛んでしたが、これでは人が装うという文化的側面や心理的側面が抜け落ちる。1980年代から研究が変わって来ましたが依然として、被服学科や服装関係の学科では、家政学と繊維工学から捉えていたのです。そういう状況にあって、もう少し広い範囲で衣服を捉えて欲しいという希望を抱いて、先ほどご紹介した抄録索引誌『衣料情報レビュー』を年2回発行しました。これは24年間続きました。1984年からは冊子に加えデータベース化に着手し、私が教員になった2001年には冊子がなくなり、データベースだけになってしまったのです。文献情報と文献の所在情報に関する二次データベースですが、現在はデジタル文献情報の入手も可能になっています。ただ、著作権等の問題があるため、私たちが積極的に文献をデジタル化するということはもちろんしていません。ネットに情報が出たら必ずリンクを貼っていくことをしています。

これらのデータベースは近代日本を対象にしたものですが、国立国会図書館の前身の帝国図書館は、建物は現在、国際子ども図書館として再生していますが、その前の国立国会図書館支部上野図書館の時代に、蔵書閲覧の希望を伝えたところ、許可が下り、中に入ることができました。蔵書は90万冊ありましたが、服装関係の書籍は、日本十進分類法のいろいろな分類番号に散在しています。300番台、500番台、700番台というように、人類学、繊維工学から芸術まで、非常に範囲が広いわけです。こうなると、旧帝国図書館の書誌情報のタイトルだけ見ても、服装関係の情報が含まれているかどうか、分からない。例えば、『満州旅行記』という本の中を見ると中華服が出てくる。『豆腐の作り方』と言う本には豆腐の衣類が出てきたり、『狸の飼い方』という本には毛皮の話が出てくる。本当に沢山出てくるわけです。これらの本を驚きながら見て、とうとう90万冊全部を見尽くし、その中から服装関係の本を抜いていったわけです。これを基に作成したのが『服飾関連図書目録 明治元年～昭和23年』です。日外アソシエーツが発行し、紀伊國屋さんが売っていただきました。こういうことをしながらデータベースと図書の両面でやっていくというのが私たちの考えだったわけです。データベースだけでは、まだ見てくれる人が少ない、本にしたら見てくれるだろう、という考えがありましたし、私たち自身もデジタルデータだけでは不安だった。抄録索引誌の『衣料情報レビュー』も『服飾文献目録』（日外アソシエーツ）として発行

されました。そして、『服飾関連図書目録 明治元年～昭和 23 年』と『服飾文献目録』をベースにした身装文献データベースが服装・身装文化デジタルアーカイブの基幹データベースになったというわけです。シソーラスに当たる身装概念コード表もデータベースのために作成しました。

## 身装文献DBのメタデータ

- 書誌情報
- 時間と空間
- 専門分類
  - ファセット分類で2面（アイテム×その流れ）を設定
- シソーラス（身装概念コード）
  - 専門分類を展開させる
  - 同義語・類義語を集めてコード化
- 身装概念コードの例
  - EQ10 [色；色彩]
    - EQ100 [色彩学；色彩理論]
    - EQ101 [流行色；色彩傾向]
  - EQ12 [文様；模様；柄]
- フリーキーワード

### ファセット分類法を採用し、概念をコード化

メタデータは、書誌情報の他に時間と空間、専門分類、シソーラスを作りました。専門分類では、日本十進分類法のような列挙型分類法の対極にあるファセット分類法を採用し、アイテムとその流れの二つの面を設定して、その掛け合わせで分類を付与しました。これは実は、私が大阪樟蔭女子大学の衣料情報室にいた時に採用していた分類法です。シソーラスは、専門分類を展開させ、同義語・類義語を集めてコード化しました。すなわち、優先語を選ばなかったということです。人文系の学問では言葉にこだわるため、論争が生じるのを避けるために、絵巻と絵巻物のいずれかを優先語にしないで、コード化したということです。身装概念コードの例を挙げると、EQ10[色；色彩]とEQ12[文様；模様；柄]は同列です。そして、これらを上位概念とする下位概念がある。EQ10の下にEQ100[色彩学；色彩理論]、EQ101[流行語；色彩傾向]があり、その中に同義語や類義語が集められコード化されている。検索する人は「色」で検索しようが「色彩」で検索しようが、データベースはEQ10を見に行くため、検索結果に漏れが少ないという利点があります。





Cultures)」は民族学の地域分類です。この地域分類と身装概念、服装専門分類がデータベースの思想を表すと私は思っています。現在、国立情報学研究所が運営する学術情報ナビゲータ CiNii（サイニィ）にリンクができ、身装文献データベースの全文を見ることができるようになっています。

## 衣服・アクセサリ―標本DB

- 西欧服装の各地域への拡散の検証
  - 西欧服装のグローバル化
- メタデータのひとつの項目である構造技術（ダーツやギャザー）の項目にグローバル化をみるメニューを設定
- ハイパーカード（1996）→衣服標本DB（1997）+アクセサリ―標本DB（2004）+フィールド写真（2008）
- 『国立民族学博物館衣服標本カタログ』
  - 民博の研究報告別冊 19(1)として1998年に発行

## 衣服・アクセサリ―標本データベース

次に、衣服・アクセサリ―標本データベースに移ります。民博が作っているため、民博の所蔵データベースと誤解されやすいですが、そうではありません。西欧服装の世界各地域への拡散をグローバルに見ようと考えて研究者が作ったデータベースです。メタデータの一つの項目に構造技術というのがあります。構造技術とは要するに縫製技術ですが、縫製技術に洋裁の技術がどの程度入っているかということを見ていくわけです。特にアジアの服装が大きなウェートを占めていますが、専門家に近い人が一点一点ごとにポイントを掴んでインデックス化していくということをしたわけです。最初はアップルのハイパーカードで作りました。それをモデルに、衣服標本データベースとアクセサリ―標本データベースを作り、フィールド写真まで入れて、今公開しています。1998年までのものは国立民族学博物館研究報告別冊という形で『国立民族学博物館所蔵 衣服標本カタログ』として1998年に発行しました。

## 衣服・アクセサリ-DB の検索画面

キーワードを入力して「検索」ボタンをクリックしてください。

検索ボタン    クリア

地域 → **地域**  
身装概念 → **身装概念**

以下のいずれかの語を含む     以下のすべての語を含む

以下のいずれかの語を含む     以下のすべての語を含む

**構造技術のプルダウンメニュー**

F12:ウエストゾーンに切りかえがある  
 F20:股または袖付けに褶を用いている  
 F32:ミシンで縫った箇所がある  
 F47:袖がついている  
 F48:股または袖付けに曲線裁ちの部分がある  
 F49:バスト、ヒップ、肩胛骨にむかうダーツがある  
 F50:特定部分以外にあき、切れ目がある  
 F59:肩傾斜がある  
 F63:ウエストゾーンにギャザー等がある  
 F75:上半身着または全身着の身頃がうちあわせ  
 F76:固定的な留め具をもつ  
 F77:非固定的な留め具をもつ(ひも;おび  
 F79:左右が非対称である

1:衣服標本     2:アクセサリ-標本     3:マヤの文     4:

表示件数:    
 検索    クリア

これが「衣服・アクセサリ-標本データベース」の検索画面ですが、地域と身装概念は、身装文献データベースとの横断検索を想定して作りました。先ほどの構造技術に関して言えば、洋服が普及している今では想像しにくいかも知れませんが、ウエストゾーンの切り替えがあるとか、ミシンで縫った箇所があるとか、あるいはギャザーがあるとか、袖付けが曲線裁ちかどうか、これらが民族服、地域の服装にどのくらい入っているかということを見ていき、コード化していくということです。

## 地域の項目で「ネパール」 を検索 詳細画面

拡大画像

### メタデータ

標本番号	#18192
QWC	A31
地域名	ネパール王国
標本名	チベット仏教僧侶上着 (袈裟巾)
形態	CS4 : [厚絹衣]
標準的署名	A01 : [コート型]
収録場所	DP-15-23-05
丈	B04 : [80cm~120cm]
素材	E10 : [絹] E70 : [絹]
構造技術	F12 : [ウエストゾーンに切り替えがある] F47 : [袖がついている] F48 : [股または袖付けに曲線裁ちの部分がある] F63 : [ウエストゾーンにギャザー等がある] F75 : [上半身着または全身着の身頃がうちあわせ] F77 : [非固定的な留め具をもつ(紐, 帯など)]
キャプション	赤 黄 青 オレンジ 花柄 両面にタック キモノカラー キモノスリーブ
関連情報	標本資料の検索ページ (1件)

これは地域の項目でネパールを検索した結果ですが、メタデータや専門家が撮影した写真がたくさん出ます。拡大画像も出ます。民博の衣服・アクセサリー標本目録データベースにもリンクがされています。

ネパールのフィールド写真とメタデータ

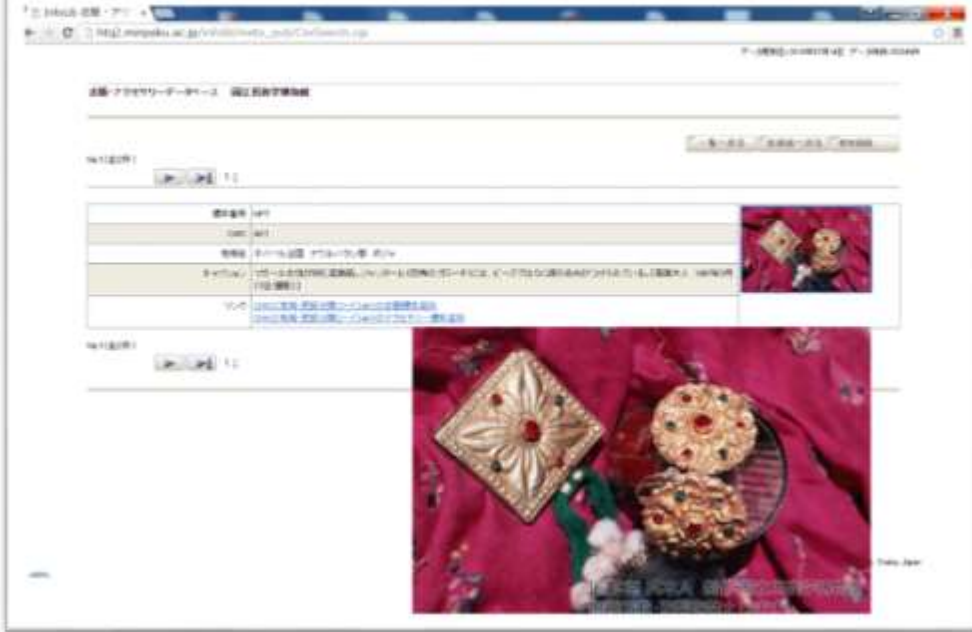


標本番号	NP8
OWC	AK1
地域名	ネパール王国 ナールバラシ郡 ボジャ
キャプション	ボジャ村におめかしして遊びに来た隣村の未婚女性。NP000007の装飾品の持ち主で、身につけて見せてくれる。〔南真木人 1987年3月17日〔撮影〕〕
リンク	<a href="#">OWC(地域・民族分類コード)AK1の衣服標本資料</a> <a href="#">OWC(地域・民族分類コード)AK1のアクセサリー標本資料</a>



フィールド写真もあります。これはネパールとアンデスのもので、フィールド写真はまだそれほど多くはありません。私自身は東南アジアから集めていきたいと思っていますが、フィールド写真は民博のフィールドワークの専門家が撮ってきた写真を搭載させてもらっているわけです。キャプションに、「ボジャ村におめかしして遊びに来た隣村の未婚女性」とあります。撮ったのは南真木人先生という私たちの研究グループのメンバーの1人です。きちんとキャプションを付けてくれているのが大きいのです。キャプションがなければ何の写真か分かりません。未婚か既婚かも分かりません。ネパールの服装をさらに見たければ、リンクの先を見ればよいわけです。

## キャプションに従ってのリンク先



キャプションに従ってリンク先を見ると、写真の人が身に着けているアクセサリーが出てきます。現地にフィールドワークに行った先生が買って来ると、このように写真を載せることが出来るのです。アクセサリーのキャプションもついています。でも、こういう例はまだ稀です。

## 衣服・アクセサリー標DB (cont' d)

- 横断検索を予測して、文献・標本共通のメタデータを試みる
- 結果、それぞれの特性を尊重して、2本立てとする
- しかし、「地域」の項目は共通
- 文献の身装概念コードも一部利用
- 標本の詳細なDB化は、画面で事足りることが多く、モノを痛めない、人手を減らすことが出来る ←民博の要請に応える

衣服・アクセサリー標本データベースについてももう少し触れると、横断検索を想定して文献・標本共通のメタデータの付与を試みました。ですが、文献と標本の特性を活かすことを考えると、どうしても共通のメタデータ付与は無理だ、ということが分かり、各々の特性を生かして2本立てにしたのですが、しかし地域と身装概念は、横断検索を想定してメタデータを共通にしています。データベース化は民博にとってもメリットがあり、標本で

研究したい人にはデータベースを使ってもらい、どうしても現物を見たい場合に限り、閲覧サービスを行なう。そうすると人手も省け、標本は非常にフラジャイルで繊細な標本を保存するという点でもメリットがあります。

## 近代日本の身装電子年表

- 1868年（明治元年）から1945年の終戦までの期間を対象
- この期間は、和装と洋装が拮抗した時代
- 各年の「身装」に関する既成事実の正しい理解
  - 服装史では、各年のことは判らない
- 新事実の発見や、その手がかりとなる情報
- 詳しい流行情報や各年の物価・賃金も
- 映画やお芝居のシーン作りにも役立つ
- 『増補改訂 近代日本の身装年表』発行予定

### 近代日本の身装電子年表

次に近代日本の身装電子年表に移ります。これは 1868 年から 1945 年の終戦までの時期を対象としています。近代はどの分野でも非常に興味深い時代で、研究が盛んですが、服装史では和装と洋装が拮抗した時代で、実に面白いうねりのある時だったのです。この時期を外してデータベースを作っても意味がないと考え、まずはここから始めたわけです。これで何が分かるかと言うと、各年の身装に関する既成事実の正しい理解をしたい、ということです。服装史では年毎のことはよくわかりません。すでに言われていることの間違いや新しい発見に関する手掛かりを得ることができる。今回『増補改訂 近代日本の身装年表』（三元社）は本として発行しますが、そのためもあって、詳しい流行情報などを入れましたが、当時の服装、反物の値段の大体の目安にさせていただくつもりで各年の物価賃金も入れました。もともと映画や芝居のシーンを作る際の時代考証にも役に立つのではないかという思いもありましたが、当時の新聞記事や雑誌記事で編まれたものです。



## 近代日本の身装電子年表 (cont' d)

- ・〈事件〉 時がはっきりしている
- ・〈現況〉 時があいまい
- ・〈回顧〉 昔を思い出して語る。年表形式ではなくて、従来のDB型
- ・〈現況〉には各年の事例となる画像を
- ・当時の新聞・雑誌記事（アーカイブズ資料）が中心

近代日本の身装電子年表はある意味、副産物として生まれたものですが、データベースは事件、現況、回顧の3つに分かれています。事件は本来の年表で、発生の日時がはっきりしているものであるのに対して、現況は日時が曖昧です。流行のように、始まりと終わりの日時を定められるものではないものは、事件と一緒にすることはできないという理由で、現況にして事件と区別しました。回顧は昔を思い出して語るというもので、年表形式にするのは無理なので、従来の民博のデータベースの形になっています。現況には当時の新聞雑誌記事のアーカイブ資料を中心に、事例となる画像を入れています。身装文献データベースはライブラリ、標本データベースはミュージアムに相当しているわけで、私たちのデータベースは ML 連携が成り立っているのを売り物にしています。

**身装電子年表  
「現況」、「情景」、「事件」  
のレイアウト**

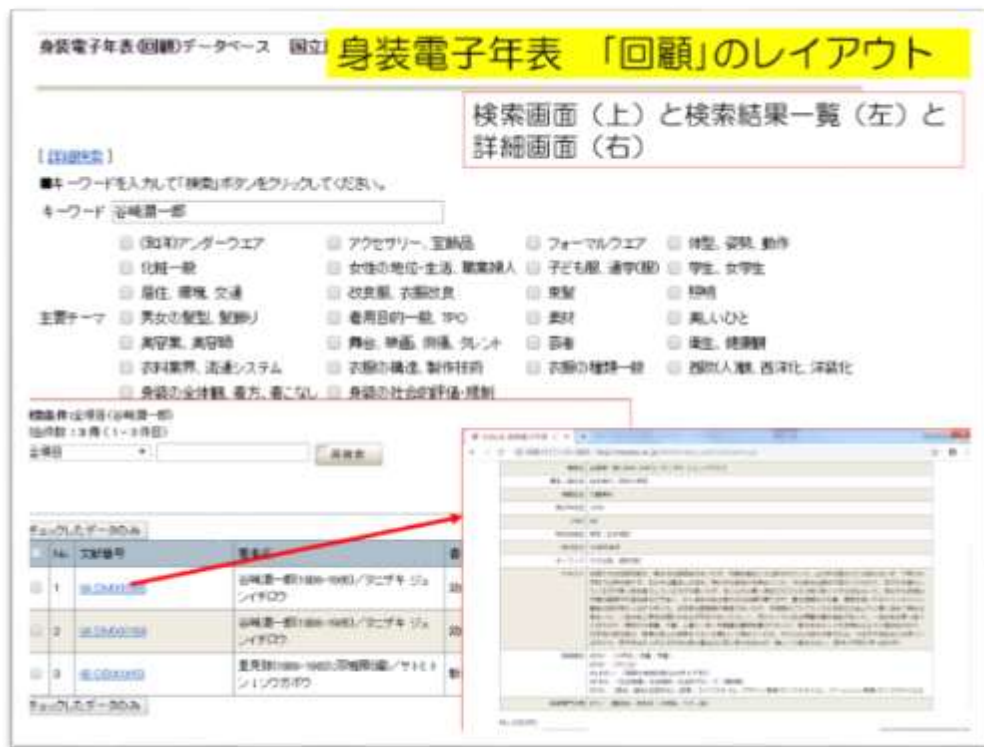
左から3つの欄に分ける  
「現況」、「情景」、「事件」

場合によっては、右のよう  
に原文テキストも表示

中身を見ていただくと、現況と事件に分かれています。現況は大丸弘先生と私が中心になって、新聞雑誌記事を身装の観点から書き直し、該当する記事で必要なものは原資料のイメージ画像を出すようにしています。



検索もできます。美容、結髪、美容院、結髪業などで検索すると色分けした形で出てきて、いつ頃どういう言葉が浸透したか、美容業という言葉がいつ頃に浸透したかというのが色で分かるようになっています。



回顧は普通のデータベースの形になっていますが、重要主題を作り、関連のあるデータを抽出する形式にしています。これは谷崎潤一郎の少年の頃の思い出が綴られたものです。細かい字のところです。

## 電子年表でどんな事実が見えてくるのか パーマネントの禁止について Wikipedia 1939年の項の記述のまちがい

- Wiki 1939年6月16日 日本国民の男子の長髪及び女子のパーマネントを禁止する「生活刷新案」が閣議決定 という記述は、まちがい
- 電子年表 1939年6月17日 警視庁は昨日精動（精神総動員連盟）の「生活刷新に関する小委員会」で取り上げられたパーマネント禁止について、内外の美容雑誌を参考にパーマネントの再検討を開始・・・（朝日新聞1939年6月18日）
- パーマネント自体は、手入れが簡単なため、戦時中には適した髪型。ただし、電気を多く費やした。
- 国は一度もパーマネントの禁止はしていない。

どんな事実が見えてくるか、パーマネントの禁止という例をご紹介します。ウィキペディアの「1939年」の「6月16日」のところに「パーマネントを禁止する「生活刷新案」が閣議決定」という記述があるのですが、これは間違いで、閣議決定までいっていないのです。統制経済にあって電力は貴重資源だったため、政府は電気の過剰消費を嫌ったわけですが、だからと言ってパーマネントを禁止したわけではなく、政府や警視庁はむしろパーマネントを何とかして存続させる方法はないかということを考えていました。そのような状況にあって、美容業界は電気の使用を控え、代わりに木炭を使ったりしていたわけです。そういう工夫が新聞を読んでいると、だんだん見えてきて、今まで言われていたことに大きな間違いがあるということに気がつきます。

## 身装画像データベース「近代日本の身装文化」

- 1868年（明治元年）から1945年の終戦までの期間を対象
- 和装から洋装への「文化変容」の過程を画像で
- 新聞連載小説挿絵を多用 その信憑性については論文等で示す
- シソーラス（身装画像概念コード）作成



身装画像（概念）コード、年代、製作者のプルダウンメニュー

## 身装画像データベース

次に身装画像データベースに移ります。身装画像データベースも画像で、1868年から1945年までの期間をカバーし、画像のシソーラスも作っています。

### 新聞連載小説をデータとする利点と留意点

- 美術からも文芸からも継子扱いの挿絵
- しかし、マイナスイメージは、当時、高価だった写真では撮影されていない
- 当時の大衆が納得のいく標準的な情景
- 衣装価値の高い明治時代
  - テキストに詳しい説明がしばしば
- とくに、1880年代後半～1890年代の挿絵は信ぴょう性が高い
  - 作者に忠実な画家、うるさい読者
- 留意点としては、たとえば
- いつまでも美人顔は浮世絵顔
  - 文中の「現代風の丸顔」も浮世絵顔など



1889 (M22) 年10月2日の大阪毎日新聞  
連載小説「露露一書」から

このデータベースは新聞連載小説の挿絵を多く使っていますが、新聞連載小説をデータとする利点と留意点を先に申し上げます。挿絵は、美術でも文芸でも継子扱いだったのです。しかしマイナスイメージのものは当時高価だった写真では撮影されなかった。それは無理ありません。ですから記念写真とかそういうものはない。ところが挿絵ではよく描かれている。大衆が納得のいく標準的な情景が描かれ、なおかつ当時は衣装価値が高かったためテキストにしばしば詳しい説明が付されている。特に1880年代後半から1890年代の挿絵は信憑性が高いです。これについては私たちが論文で色々書いて示しましたが、小説の作者と挿絵作家と読者がトライアングルになっている。そういうことで非常に信憑性の高い挿絵がこの時期に多かったということです。留意点としては、いつまでも美人の顔が浮世絵風に描かれているということです。作者も挿絵作家も読者も皆の思いが付いていかなかったということです。丸顔の美人となっても浮世絵美人が描かれているということです、所詮挿絵は絵空事です。しかしその中からどう真実や事実関係を見分けていくか、ということが大事です。



# 身装画像(概念)コードの枠組み

## 景観、情景

- K. 景観
- G. 建造物等の概観
- H. 屋内
- J. 不特定情景—  
例：宴会、遠足、  
カップル、記念撮影、  
結婚式など

## 身体、着装、アイテム

- D. からだの問題と着  
装態様
- P. 衣服一般、
- V. 和服
- W. アクセサリー
- Q. 素材・表面特性
- E. 技術一般

各コードの中身は 例：K122[水汲み場：洗濯場：共同井戸]  
D1ha[歯・唇・口もとの状態]  
Vhat[半天：どてら]  
Wmae[前掛：エプロン：割烹着]

身装画像に関する概念の枠組みは、景観、情景、身体、着装、アイテムという大きな概念の下に、下位概念を作りました。例えばK. 景観であれば、水汲み場や洗濯場等と一緒にしてK122に括るといようなことをしています。

## 「廂髪」の検索結果例

### メタデータの内容

- 1) コメント
- 2) 資料の書誌情報
- 3) 作者
- 4) 身装画像概念コード
- 5) 年代
- 6) 国名
- 7) キーワード
- 8) 特定地域
- 9) 男女別
- 10) セット画像
- 11) 著作権

大丸弘・高橋靖子  
『新聞連載小説挿絵で  
みる近代日本の身装文化』2019年 三元社  
コメントの内容を書籍に



メタデータとしてコメントがあります。コメントは身装の観点からの挿絵に関するコメントですが、ここに挙げている例では、お嬢さんの心情や手先を袖にくるんで口を押えている心の具合を書いています。挿絵が掲載された連載小説のテキストも出ています。テキストと画像が見えるようになっていて、かつコメントがあるわけです。コメントの一部は『挿絵でみる近代日本の身装文化』（三元社）の中に再掲されています。ここでも私たちはやは



り本を作りました。

参考ノート  
ある事柄について、一定の知識を得ることができる (1600~2000字)

本化

本文 No.222 廂髪

参考ノートの内容を書籍に

大丸弘・高橋晴子  
『日本のすがたと暮らし-明治・大正・昭和前期の身装』  
(2016年 三元社)

「廂髪」の検索結果

大丸弘・高橋晴子『日本人のすがたと暮らし』

もう一つ、参考ノートというものがあります。参考ノートは一定の知識を提供するものです。例えば先ほどの挿絵に廂髪が出てきましたが、廂髪で参考ノートを検索すると、説明文の中に廂髪という単語を含む参考ノートの項目がハイライトされ、その中から廂髪をタイトルに持つ項目の説明文読むと、廂髪に関する当時の基本的な知識が得られるという仕組みです。参考ノートも『日本人のすがたと暮らし』(三元社)として2016年に発行しました。このように、常にデジタルと本の両方でやってきたのには、デジタルだけでやることの不安と、利用者の利便性を考えたということがあったのかな、と思っています。

## 画像を分析するにあたって

- 画像データの出現は無限
- “衣服を着ている人”の画像をすべて集めるのは不可能でもあり、無意味
- 画像データの評価・選択は必須
- そのための評価基準の策定
  - 今回は、「文化変容」にかかる重要主題の明確化
- そして、画像中のなにを索引するか
- 画像自体は、指示性は低い
- 文字と組み合わせさせて、はじめなんであるか、ということが明らかになるー図鑑が良い例
- テキストを伴う新聞連載小説挿絵のメリット
- ただし、当時当たり前のことは書かれていない

画像の分析で重要なことはまず、画像データをすべて集めるのは不可能であり、無意味です。画像データの評価・選択が必須です。身装画像データベースでは1868年から1945年までの文化変容に関わる重要主題を明確化し、それに関連する画像を集めたわけです。先ほど近代日本の身装電子年表の回顧のところ、重要主題はこれだけですと言いましたが、それと関係があるわけです。そして画像中の何を索引するかですが、画像自体は指示性が低い。知識がなければ画像の指示内容は分かりません。皆さんが図鑑で経験していらっしゃると思います。文字と一緒に初めて絵の指示内容が非常によく分かるようになるのです。これがテキストを伴う新聞連載小説の挿絵のメリットです。もちろん、当時当たり前だったことは小説の中では敢えて触れられません



助かるのは、たとえば、右の女性の髪型について、英吉利風の束髪という説明が挿絵のテキストに書いてあるのです。写真の場合は分からないものが、毛筋まで書く挿絵なら分かるというメリットがあります。それから1899年にシーツが使われ始めるのですが、1903年くらいになると、誰もがシーツを敷くようになります。これは西洋の影響で日本人の衛生観が変わったことを示す良い例です。また当初は床の間に載っていた扇風機が、十年も経つと今と同じような使い方になります。

## データベースの国際化と標準化-試み

- 身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉の国際化をめざす試み
- 検索概念コードである、「身装画像コード」に含まれる用語の英語化を行う
- 英語に翻訳された「身装画像コード」による検索の実現
  - 既存のシステムと仲介役をするGUIの作成
- 画像のモチーフについてのアノテーションの作成
- 課題1－英語化をどこまで拡げるか
- 課題2－民博との調整

### 今後の課題としてのデータベースの国際化と標準化

データベースの国際化と標準化、これが今後の課題にも入ってくるわけですが、近代日本については外国のニーズが高いので、国際化を目指しています。まず着手したのは、検索概念コードである身装画像コードに含まれる用語の英語化です。ただ、民博のデータベースに触るわけにはいきませんので、その代わりに GUI (Graphical User Interface) を作り、それを使って英語で検索をするという試みをしました。さらに画像に英語のアノテーションを付ける。たかが髪型でも、当時は一つの記号です。女性が既婚か未婚か、芸者かどうか、髪型を見れば分かる。髪型に限らず、当時、特に明治の頃は、衣服全般が、丁稚風、番頭さん風、銀行員風というように、その人の社会における職種や素性を示す記号の役割を果たしていました。事故や事件で死体が出てきた場合、衣服についてもすごく詳しく説明されるわけです。衣装価値が高かったというのがありますが、衣服で大体身元が分かったわけです。

## One of the Retrieval Results with Search Word "Yukata (Light-weight Cotton Kimono)"

Shinsou Image Code: D7re: [Upper Society Daughters as Models] 令嬢モデル; D7jog: [Female Students] 女学生; D2so: [Sokuhatsu, Women's Hairstyle after the Meiji Period (Tategata/Taller Shapes for the Earlier Period)] 束髪(前期縦型の); Vyu: [Yukata (Light-Weight Cotton Kimono)] ゆかた; Vob: [Obi (Fabric Belts)] 帯; D3ob: [How the Obi Belt is Tied; The Position of the Obi] 帯の締め方; 帯の位置; Wou: [Folding Fans; Uchiwa (Rigid Summer Fans); Electric Fans] 扇子; 団扇; 扇風機; H311: [Private Rooms; Small Rooms (not for Sleeping); Boudoirs] 私室; 小部屋(寝具のないこと); ブドワール; H00: [Lighting; Lighting Fixtures] 照明; 照明具(一般)

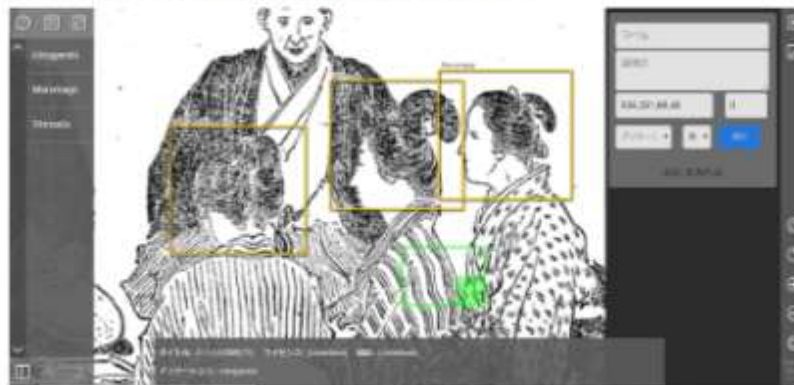
*Shingakushi (A Newly Graduated) (27), Osaka Mainichi Newspaper (January 27, 1904)*



After taking a bath, she is reading *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* by Washington Irving in a boudoir, reviewing what she learned at school.

これが例です。去年発表したものの一部ですが、身装画像概念コードを英語にする。そして検索結果がこのように英語表現を含む形で出てくるといところまでは実現しています。

## The Graphical Annotation Function for the Contents of an Illustration has been Introduced



Annotations can be attached to each of the objects in the image, in this case, for each of hairstyles shown in the illustration:

- Left: Ichogaeshi (women's hairstyle since the mid-19<sup>th</sup> century)
- Middle: Shimada (traditional hairstyles for unmarried women)
- Right: Marumage (a traditional hairstyle for married women).

A green box appears in the illustration, ready for adding a new annotation.

32

これがアノテーションです。左側の背中を見せている女性の髪型が銀杏返し、真ん中は高島田で未婚女性の伝統的な髪型、右側は丸髷で結構年を取った既婚者の髪型ということが英語で説明されています。



## 立命館大学ヴァーチャル・インスティテュート -MCDプロジェクトの現在の利用状況



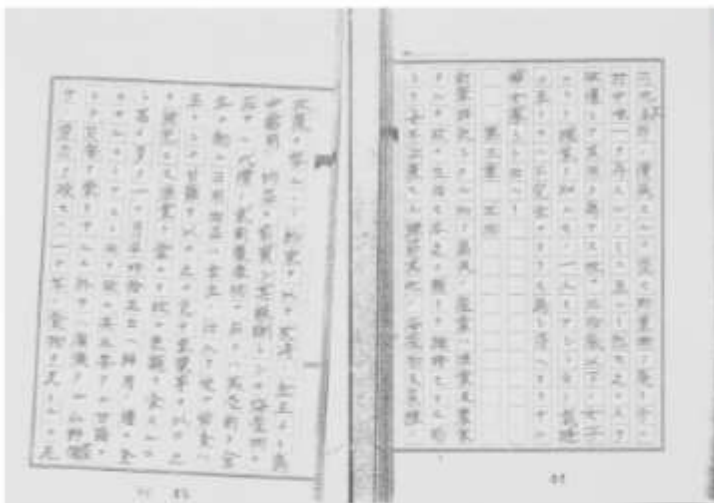
4本のデータベースにリンクを貼る  
複数のサイトからアクセスできる環  
境づくり



《身装画像データベ  
ス》のサイトでは、英  
語版も  
現在は非公開  
レイアウトの調整、な  
らびに民博との調整が  
必要

それから今やり始めたのが、立命館大学のバーチャル・インスティテュートからこの4本のデータベースにリンクできるようにしました。複数のサイトからアクセスができるという環境づくりです。身装画像データベースのサイトは、英語検索のプロトタイプが出来ていますが、一般には非公開で、クローズド版として利用できる形にしています。

## 未公開のアナログ資料 手書きから印刷物まで 全国の地方誌 鹿児島県の例



課題一  
・データの見せ方  
・検索方法  
・著作権の処理

それから、全国の地方誌という非常に貴重な未公開資料があるのですが、今年ようやくデジタル化が完了しました。





さらにデジタルデータとアナログ資料が混在した画像もあります。特に絵葉書です。身装の概念に従って収集されたファイルに多くの絵葉書が入っている。これもデジタル資料として公開したいと私は思っています。著作権が切れていない資料もあるので、クローズド版としてでもいいから公開していきたいと思っています。

## 今後の課題

- データベースの国際化と標準化 (going)
  - とくに身装画像データベースの英語化
    - 画像のIIIF化 (本来の身装画像データベースの画像含む)
    - クリエイティブ・コモンズの導入
    - メタデータの標準化
  - 衣服・アクセサリ標本データベースにCIDOC-CRMのマッピング
- 未公開のアナログ資料・デジタルデータの公開
- データベースのライフサイクルを考える
  - 民博と著作権を共有したことによるメリット
  - しかし、後継者問題はこれから
  - 著作権共有から生じる限界—どう対処するか

今後の課題は、データベースの国際化と標準化は今継続中ですが、当然ながら IIIF( International Image Interoperability Framework、トリプルアイエフ)化は完了しています。日本語版も画像の IIIF 化を行ない、クリエイティブコモンズに則ったライセンス付与を行ない、メタデータについては標準的な記述方法である RDF による標準化を考えていきたい。もう一点は、衣服アクセサリ標本データベースを、CIDOC-CRM にマッピン

グする実験まではやっています。そして未公開のアナログ資料をデジタル化して公開していくことが課題なのですが、つくづくデータベースのライフサイクルというものを考えるのです。民博と著作権を共有したことにより、4本のデータベースは私の命よりは長く生きながらえてくれます。しかし、長く生きながらえても、更新しないまま生きながらえるような状態は避けたい。更新をしていかないといけない。後継者問題が常について回ります。私たちはどんどん歳を取ります。先ほど紹介した立命館のバーチャル・インスティテュートを使うのも、その限界を克服するための一つの対処法ですが、小回りはききませんから、5年でリプレースしたり、ちょっといじって変更して欲しいということができないのです。違うサイトから GUI を上手く使って、クラウドにデータを上げて、そこで検索をできるようにして、同時に民博との関係も維持するという仕組みは可能かな、と今模索中です。ご静聴ありがとうございました。